



Title	間近から見たグローバル・ヒストリー：当事者たちの証言による七年戦争（1756-1763年）
Author(s)	フュッセル, マリアン; 前田, 星//訳; 田口, 正樹//訳
Citation	北大法学論集, 70(5), 61-81
Issue Date	2020-01-31
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/76664">http://hdl.handle.net/2115/76664</a>
Type	bulletin (article)
File Information	lawreview_70_5_05_Fussel.pdf



[Instructions for use](#)

# 間近から見たグローバル・ヒストリー

—— 当事者たちの証言による七年戦争（1756-1763年） ——

マリアン・フュッセル  
前田 星・田口正樹（訳）

七年戦争（1756-1763年）は、グローバルな規模の紛争であり、ヨーロッパ、北アメリカ、カリブ海、アフリカ、南アジアにおける戦争の舞台と戦線を結びつけた<sup>1</sup>。もともと、それぞれの国民国家的な視角に応じて、それは18世紀のまったく別の2つの紛争を表わしていた。ドイツとオーストリアにおいては、七年戦争は第三次シュレージエン戦争として長らく記憶されてきたのであり、それとともにみずからが奪取したシュレージエンを確保し、そのようにしてプロイセンとオーストリアの二元主義を固めようとする、フリードリヒ大王の絶望的な闘争として記憶に残ってきた。イギリスとフランスにおいては、七年戦争はヨーロッパと大洋上における主導権を巡る戦争として記憶され、それは大英帝国のヘゲモニーで終わったのであった。（それらとはまた別に）アメリカにおいては、「フレンチ・インディアン戦争」という名前のもとの、アメリカ独立戦争の前段階である<sup>2</sup>。カナダにおいては、七年戦争は「フレンチ・インディアン戦争」と呼ばれるだけでなく、「ヌーヴェル・フランス」の確定的終焉という結果を伴った「征服戦争」とも呼ばれる<sup>3</sup>。インド人にとって、七年戦争はカル

<sup>1</sup> 以下の論述は私のモノグラフに基づいている：*Marian Füssel, Der Preis des Ruhms. Eine Weltgeschichte des Siebenjährigen Krieges*, München 2019. グローバルな次元についてのよい概観として、*Mark H. Danley/ Patrick J. Speelman* (Hg.), *The Seven Years' War. Global Views*, Leiden/ Boston 2012を参照。

<sup>2</sup> *Fred Anderson, Crucible of war. The Seven Years' War and the fate of the Empire in British North America, 1754–1766*, New York 2000.

<sup>3</sup> *Guy Frégault, Canada: the war of the conquest*, Toronto/ Oxford 1969 [frz. Orig.

ナティクにおける第三次戦争として、またベンガルにおける紛争として、イギリス植民地への道程上の重要な1章であり、スペインにとっては、イギリス・ポルトガルとの「幻想的な戦争」は海上世界権力としての地位に次第に別れを告げる中での1つのエピソードであった<sup>4</sup>。スウェーデンにおいては、七年戦争は「ポンメルン戦争」として記憶されており、ロシアにとっては、それは西方への長い道の歴史における1つの段階であった<sup>5</sup>。しかしそこから結果として出てくる中心的問題は、これらの多様な戦場が互いに結び付けられていたのか、いかに結び付けられていたのか、そして同時代人がそれをいかに認識したのかという問いである。

七年戦争の歴史についての文献は、既にその終結直後から始まる。初期のイギリスの叙述においては、そのグローバルな次元がはっきりと現れている。例えばジョン・アルモンは、早くも1763年に公刊された彼の『先の戦争についての公平なる歴史』を、「アメリカ」、「アジア」、「アフリカ」および「ドイツ」における「出来事」の章に分けた。1763-1764年に出版されたジョン・エンティックによる5巻からなる包括的叙述も、既に「ヨーロッパ、アジア、アフリカ、アメリカにおけるその発生、経緯、そして出来事を含んで」というサブタイトルを持っている<sup>6</sup>。もっともドイツにおいては、ようやく18世紀の終わりごろに、

---

1955]。

<sup>4</sup> *Michael Mann*, *Bengalen im Umbruch: die Herausbildung des britischen Kolonialstaates 1754–1793*, Stuttgart 2000; スペイン対ポルトガルの戦争については、vgl. *António Barrento*, *Guerra Fantástica, 1762: Portugal, o Conde de Lippe e a Guerra dos Sete Anos*, Lissabon 2006, およびさしあたり *Patrick J. Speelman*, *Strategic Illusions and the Iberian War of 1762*, in: Danley/ Speelman, *Global Views* (注1), S. 429-460.

<sup>5</sup> *Teofran Sæve*, *Sveriges deltagande i sjuåriga kriget åren 1757-1762*, Stockholm 1915 およびさしあたり *Gunnar Åselius*, *Sweden and the Pommeranian War*, in: Danley/ Speelman, *Global Views* (注1), S. 135-164; *Walther Mediger*, *Moskaus Weg nach Europa. Der Aufstieg Russlands zum Europäischen Machtstaat im Zeitalter Friedrichs des Großen*, Berlin 1952; *Hamish M. Scott*, *The emergence of the Eastern powers, 1756 – 1775*, Cambridge [u.a.] 2001を参照。

<sup>6</sup> *John Almon*, *An Impartial History of the Late War. Deduced from the committing of Hostilities in 1749, to the signing of the Definitive Treaty of Peace in 1763*, London 1763; *John Entick*, *The General History of The Late War: Containing it's Rise, Progress, and Event in Europe, Asia, Africa, and America [...]*, 5 Bde. London 1763-1764.

ゲオルク・フリードリヒ・フォン・テンペルホフとその七年戦争の歴史 (1783-1801年) や、ヨハン・ヴィルヘルム・フォン・アルヘンホルツのほとんど同名の著作(1788年)のような、同時代の証人による著作であって、長く影響力を保った包括的叙述が出版された<sup>7</sup>。テンペルホフは、その際明らかに初めて「七年」戦争という概念を印刷物の中で創造した。その時までほとんどの刊行物は「先の戦争」とのみ語っていたのである<sup>8</sup>。この頃、つまり18世紀末に、七年戦争がプロイセンにおいても、その世界規模にまたがる次元で見られえたということ、1792年に国王フリードリヒ・ヴィルヘルム2世に献呈された、ヨハン・ミヒャエル・フリードリヒ・シュルツェ (1753-1817) の「七年戦争の歴史表」が明らかにする<sup>9</sup>。この歴史表はベルリンの「商業・市民学校」のために「便利な共時的概観」が得られるよう教育目的で案出されたのだが、2つの軸に沿って構成されている。1つ目の軸を与えるのは、1755年から始まる個々の戦争年のクロノロジーであり、もう1つの軸は戦争の主たる4つの舞台にしたがって整理されている。ヨーロッパ外の世界、神聖ローマ帝国の西側にプラスしてスペインとポルトガル、それからザクセン、テューリングゲン、シュレージエン、そして最後にボンメルン、マルク・ブランデンブルクとポーランドである。

その後19世紀になると、歴史叙述の学問化だけでなく、国民化もまた始まった。これによって、ヨーロッパ、アメリカ、あるいは南アジアの戦争の舞台は、

---

初期のフランス語の叙述として、*Jean-Baptiste Targe*, *Histoire d'Angleterre depuis le Traité d'Aix-la-Chapelle en 1748, jusqu'au Traité de Paris en 1763*. Pour servir de continuation aux histoires de MM Smollett et Hume, 5 Bde., London [= Paris] 1768を参照。

<sup>7</sup> *Georg Friedrich von Tempelhoff*, *Geschichte des siebenjährigen Krieges in Deutschland zwischen dem Könige von Preußen und der Kaiserin Königin mit ihren Alliierten*, 6 Bde. Berlin 1783-1801 (Reprint Osnabrück 1986, Bibliotheca Rerum Militarium XXIX); *Johann Wilhelm von Archenholz*, *Geschichte des siebenjährigen Krieges in Deutschland von 1756 bis 1763*, in: Johannes Kunisch (Hg.), *Aufklärung und Kriegserfahrung. Klassische Zeitzeugen zum Siebenjährigen Krieg*, Frankfurt a.M. 1996 [1793], S. 9-513; 刊行の歴史と叙述の文脈については、*ibid.*, S. 757-790を参照。

<sup>8</sup> *Hamish M. Scott*, *The Seven Years' War and Europe's Ancien Régime*, in: *War in History* 18/4 (2011), S. 419-455, ここではS. 450 および454。

<sup>9</sup> *Johann Michael Friedrich Schulze*, *Von dem Gebrauch der Geschichtskarte des siebenjährigen Krieges*, Berlin 1792。

今やたいていお互い別々に扱われた。ようやくここ20年来、グローバル・ヒストリーが重要性を増すにつれて、七年戦争は(再び)強く、グローバルな紛争としてテーマ化されてきている<sup>10</sup>。ただしその際、英語とフランス語の著者たちは、幅広く展開したドイツ語文献をごく断片的にしか知らないか、あるいはそもそもまったく認識していない。一方最新のドイツ語による叙述は、特に史料に近接して研究されたというわけでもない物語的な概観で、やはり英語圏の文献からはごく一部を考慮しているにすぎない<sup>11</sup>。

私によって選択されたアプローチは、上述のような最近のいくつかのモノグラフから明白になる次の2つの欠如に答えるものである。第1に、グローバルに方向づけられた諸著作はほとんど完全にイギリス-フランスの観点に集中して、ヨーロッパにおける、特に神聖ローマ帝国の領域における出来事を等閑視しており、一方プロイセンを中心に据えた諸叙述は逆に、イギリス-フランスの次元を過小評価する傾向にある。第2に、従来の諸著作は、モノグラフのレベルでは、社会・文化史的アプローチをほとんど含んでおらず、方法論としてはむしろ保守的に、伝統的な外交・軍事・帝国史の枠内で議論している<sup>12</sup>。それに代わって私は以下で例示的に、18世紀の社会・文化・政治・経済的变化にとって特徴的と思われる3つのプロセスを、同時代の戦争認識および解釈と関連させることを試みる。すなわち、アルカイックなグローバル化から近代のグローバル化への変化、情報生産と読者革命、および物質的消費文化の変化、で

---

<sup>10</sup> *Tom Pocock*, *Battle for Empire: the very first world war 1756-63*, London 1998; *William R. Nester*, *The first global war. Britain, France, and the fate of North America 1756-1775*, Westport, Conn. [u.a.] 2000; *Matt Schumann/ Karl W. Schweizer*, *The Seven Years War: A Transatlantic History*, London [u.a.] 2008; *Daniel A. Baugh*, *The global Seven Years War, 1754-1763 Britain and France in a great power contest*, 1. ed. Harlow 2011; *Sven Externbrink* (Hg.), *Der Siebenjährige Krieg (1756-1763). Ein europäischer Weltkrieg im Zeitalter der Aufklärung*, Berlin 2011; *Danley/ Speelman*, *Global Views* (注1); *Frans De Bruyn/ Shaun Regan* (Hg.), *The Culture of the Seven Years War: Empire, Identity, and the Arts in the Eighteenth-Century Atlantic World*, Toronto [u.a.] 2014; *Edmond Dziembowski*, *La Guerre de Sept Ans*, Paris. 2015.

<sup>11</sup> *Klaus-Jürgen Bremm*, *Preußen bewegt die Welt. Der Siebenjährige Krieg 1756-63*, Darmstadt 2017.

<sup>12</sup> 例外は以下の論文集に入っている諸論文。 *Externbrink* 2011 (注10), *Danley/Speelman*, *Global Views* (注1), *De Bruyn/Regan* 2014 (注10)。

ある<sup>13</sup>。ヨーロッパの権力対立関係と国家間競争は17世紀末以後ますます頻繁に植民地の舞台をも引き込んでおり、ヨーロッパと部分的には植民地（例えば北アメリカ）のもろもろの公共圏は、同時に常に成長するメディア化と商業化によって規定されていた<sup>14</sup>。これらのプロセスにおいて、情報は商品となり、ますます広い範囲の識字層がメディアを通じて世界政治の諸事件に参加し、また新たな消費行動に結び付けられていった。3つのプロセスすべてのからみあいにとって理念型的で、啓蒙の純粋な場所でありえたのは、例えばヨーロッパのコーヒー・ハウスである<sup>15</sup>。そこでは海外植民地産の飲み物が消費され、同時に新聞が読まれ、会話が交わされた。消費、社交性、情報がいわば一箇所に束ねられていたのである。我々が以下で、我々が今日好んでグローバルなからみあいと呼ぶものの同時代的な認識様式を問うとき、これらの構造的枠組条件が常にともに考慮されねばならない。

史料的基础としては、文書化された自己証言（ほとんどが刊行されている）を収集したものが用いられる。それは約200に達する様々なアクターの証言であり、それらのアクターは数少ない重要な例外を除けば約95%が男性である<sup>16</sup>。これらの証言者たちは、ほとんど全ての戦争参加勢力ないし戦場を代表しており、7年の大部分にわたって記録を残している。更にそれらの選択にあたっては、さまざまに異なる社会層と役割、および多様な観察範囲が考慮されている。

<sup>13</sup> *Christopher A. Bayly*, „Archaische“ und „moderne“ Globalisierung in Eurasien und Afrika, ca. 1750-1850, in: Sebastian Conrad/ Andreas Eckert/ Ulrike Freitag (Hg.), *Globalgeschichte. Theorien, Ansätze, Themen*, Frankfurt a. M./ New York 2007, S. 81-108; *Rolf Engelsing*, *Der Bürger als Leser: Lesergeschichte in Deutschland 1500 – 1800*, Stuttgart 1974; *Neil McKendrick/ John Brewer /John H. Plumb* (Hg.), *The Birth of a Consumer Society. The Commercialization of Eighteenth-Century England*, London 1982; 七年戦争に関係した3つのプロセスすべてについては、*Füssel*, *Preis des Ruhms* (注1) を見よ。

<sup>14</sup> ヨーロッパの諸戦争のグローバルな次元の評価については、*Marian Füssel*, *Global Wars in the Eighteenth Century. Entanglement – Violence – Perception*, in: Matthias Pohlig/ Michael Schaich (Hg.), *The War of the Spanish Succession. New Perspectives*, Oxford 2017, S. 371-394を参照。

<sup>15</sup> *Markman Ellis*, *The coffee-house: a cultural history*, London 2004; *Ders.* (Hg.), *Eighteenth-century coffee-house culture*, 4 Bde. London [u.a.] 2006.

<sup>16</sup> *Füssel*, *Preis des Ruhm* (注1) を参照。

グローバルなからみあいの知覚と解釈について、これらの証言を調査するために、私は3つのステップを踏むことにする。まず第1にからみあいと地政学についての同時代のメタファーを論じ(1)、第2に情報の世界規模の流通を検討し(2)、第3にからみあった歴史の物質文化に光を当てる(3)。

## 1. 炎の中の世界

一見すると、あたかも1755年のオハイオ溪谷における戦争の勃発が、ヨーロッパの列強を、それらがそう意図することなく、グローバルな紛争へと引きこんでしまったように見える<sup>17</sup>。しかし、さらに詳しく観察すると、より長期にわたる地政学的な計算がイギリス(グレートブリテン)側にもフランス側にも存在したことがすぐに明らかになる。イギリスにおいては、「海外政策」と「大陸へのコミットメント」の両陣営は特にはっきりと区別されており、そして相対的に近代的な性質をもつ政治的公衆を背景に行動していた<sup>18</sup>。王権と並んで、議会が意思決定機関として存在し、新聞雑誌が基本的に大陸よりも自由に公刊されえた。公的な議論の担い手層もまた大陸とは異なっていた。フランスでは宮廷ないし宮廷に近いエリートたちが優越していたが、イギリスでは「ミドルクラス」という形で広い範囲の住民が公衆として行動していた<sup>19</sup>。

フランスでも、イギリスと似たような党派が対立していた。すなわち、一方が大陸への政治的集中を喧伝していたのに対して、他方は植民地へのコミットメントを要求していた<sup>20</sup>。ティエリオへの書簡において、ヴォルテールは1756年2月29日付で次の有名な言葉を残している。「この戦争の構図において、アメリカの数モルゲンの広さの氷と雪のために、互いに首を切り落としあう2つの啓蒙された国民を見ること以上に、人類にとって恥ずべき特徴が他にあるかどうか、私にはわからない<sup>21</sup>。」『カンティード』において彼は1759年に同じ

<sup>17</sup> 個別の点については、*Anderson, Crucible* (注2), S. 86-107を参照。

<sup>18</sup> 「海外政策」の概念については、*Daniel Baugh, Great Britain's Blue Water Policy, 1689-1815*, in: *International History Review* 10 (1988), S. 35-58を参照。

<sup>19</sup> *Bob Harris, "American Idols": Empire, War and the Middling Ranks in Mid-Eighteenth-Century Britain*, in: *Past and Present* 150 (1996), S. 111-141.

<sup>20</sup> *Armin Reese, Europäische Hegemonie und France d'outre-mer. Koloniale Fragen in der französischen Außenpolitik 1700-1763*, Wiesbaden 1988を参照。

<sup>21</sup> *Sven Externbrink, Voltaire zwischen Candide und Roi philosophe*, in: Ders.,

言い方を再び取りあげ、イギリスの人々がフランスの人々とまったく同じように愚かであるかとの問い、以下のような答えを得ている。「しかしあなたもご存知でしょう、これら2つの人民がカナダで幾許かの雪原ゆえに戦争し、そして彼らがこのけっこうな戦争のために、カナダ全体の価値よりも多くを費やしているということ」<sup>22</sup>。これはしかし、多くの立場のうちのひとつの、比較的極端な立場であった。最近の諸研究は、フランスの政治的エリートたちが植民地における主導権に対し共通して疑いを抱いていたわけではなかった、ということを明らかにした<sup>23</sup>。実際一方の者たちは海外における戦争だけを求めており、それに対してもう一方の者たちはハノーファーとオーストリア領ネーデルラントの占領に賭けていた。しかし、植民地政策の支持者たちの間でも、意見が一致していたわけでは決してなかった。何人かの者たちがとりわけミシシッピ渓谷とルイジアナを優先したのに対して、別の者たちは断固としてカナダのために論陣を張った。

さて、ヴォルテールの「雪」とともに我々は言葉のイメージの領域にいる。広大な空間的距離を超えての交換と結びつきのプロセスを表現するために、歴史研究は今日たいてい、グローバルな「からみあい Verflechtung」ないし英語の概念で「entanglement」という言い方をしている<sup>24</sup>。それに対して同時代に、戦争の広く波及する影響を描写するために最も頻繁に用いられたのは、火災と火の粉が舞うイメージであった。これは、都市火災の恒常的な危険とともにあった社会においては、生活実感に即した強力な明証性を持った図像言語であり、既に三十年戦争のときに大いに好まれていた<sup>25</sup>。例えばハインリヒ・メルヒオ

---

Weltkrieg (注10), S. 143-157, S. 145.

<sup>22</sup> *Voltaire*, *Candide oder Der Optimismus*, München 3. Aufl. 2006, Kap. 23; S. 125.

<sup>23</sup> *John Shovlin*, *Selling American Empire on the Eve of the Seven Years War: The French Propaganda Campaign of 1755-1756*, in: *Past & Present* 2006 (2010), S. 121-149.

<sup>24</sup> *Sanjay Subrahmanyam*, *Connected Histories: Notes towards a Reconfiguration of Early Modern Eurasia*, in: *Modern Asian Studies* 31/3 (1997), S. 735-762; *Michael Werner/ Bénédicte Zimmermann*, *Vergleich, Transfer, Verflechtung. Der Ansatz der Histoire croisée und die Herausforderung des Transnationalen*, in: *Geschichte und Gesellschaft* 28 (2002), S. 607-636.

<sup>25</sup> *Hans Medick*, *Der Dreißigjährige Krieg. Zeugnisse vom Leben mit Gewalt*, Göttingen 2018, S. 14-15.



ル・ミュレンベルクが、プロヴィデンスからアインベックへのある手紙を、すでに1755年10月に次の言葉とともに書き始めている。「我々のこの地における政治的情况に関しては、戦争の炎が段階を追って拡大しつつある」<sup>26</sup>。ニーダーヘッセンのイスターにおいて、牧師ヨハン・ゲオルク・フュリングは後に彼の年代記において全く同様に論じた。1757年の年始めに彼は次のように書き留めている。「戦火が、それは前年ドイツの一角において火がつけられたものだったが、この1757年により大きな炎へと広がり、我らの大切な祖国をも襲った」<sup>27</sup>。結局のところコントロールの効かない、不慮の出来事としての飛び移る火の粉のイメージは、みずからの免責のためにも役立てられえた。たとえばフリードリヒ2世は1757年7月に、「我が政治的行動の弁明」と題する小冊子の中で、戦争勃発の責任を振りはらうために、このイメージを利用した。

「誰もが知っている。ヨーロッパを揺り動かしている混乱が、アメリカで始まったということ。イギリス人とフランス人の間で棒鱈漁とカナダの若干の未耕作地帯をめぐる勃発した争いが、今や我々の大陸を哀しみに染めている血なまぐさい戦争に、きっかけを与えたのだということ。かの争いはドイツ諸侯の所有地から非常に遠くへだたっていたので、炎がある大陸から、見たところそれと何の結び付きもなさそうな別の大陸へいかに広がりうるかを理解するのは困難であった。我々の世紀の国家統治術のおかげでしかし、現在この世界には、どんな小さなものであれ、短期間で全キリスト教世界を襲い二分することができないような、いかなる争いも存在しないのである」<sup>28</sup>。

戦争最後の数年間にも、神聖ローマ帝国のメディアは、出来事を繰り返し引火のメタファーとともに解説した。アウクスブルクで編集された『薬剤師』は、紛争全体の原因を北アメリカにおける対立に基づくと見ており、1762年には次

---

<sup>26</sup> 1755年10月25日。Kurt Aland (Hg.), Die Korrespondenz Heinrich Melchior Mühlenbergs: aus der Anfangszeit des deutschen Luthertums in Nordamerika, Bd. 2: 1753-1762, Berlin [u.a.] 1987, S. 250.

<sup>27</sup> Johann Georg Fülling, Die Isthäer Chronik des Pfarrers Johann Georg Fülling. Zur Geschichte Niederhessens im siebenjährigen Kriege. Hrsg. v. G. Bätzing. (Hess. Chroniken 1), Kassel 1957, S. 3.

<sup>28</sup> Friedrich II, Rechtfertigung meines politischen Verhaltens (Juli 1757), in: Die Werke Friedrichs des Großen: in deutscher Übersetzung, Berlin 1913, Bd. 3, S. 209-215, hier S. 210.

のように書いている。「お前（アメリカ）によって我らの国々は燃え上がった。／お前は農民を兵士にし、／市民に武装を強要する。／お前から始まった火が、／広い海を越えて燃え移り、／我がドイツじゅうで荒れ狂っている」<sup>29</sup>。イギリスによるグアドループ占領の描写において、序文には次のようにある。「今日の激しい戦争はアメリカの植民地においてその最初の火口が切られた。それゆえ我々は、ほとんどすべてのページでかの地の戦争の諸事件について読むのであるが、それらはかの地の国々の正しい認識なしには理解することが不可能なのである」<sup>30</sup>。匿名の執筆者はそれによって、植民地の報告の頻度が増えていくことについて、そのこと自体を外から眺めた観察を公表するだけでなく、これらアメリカの諸地域についての知識の獲得のために、ということはそれによってつまりみずからの商品である同誌のためにも、宣伝をしているのである。炎のメタファーは、確かに七年戦争に限られていたわけではなかったが、しかしそれは、からみあいの効果を指示するために、断然最も好まれたこの時代の図像であることが判明するのである。フリードリヒ2世にとって、1757年には、誰もが「ヨーロッパを揺り動かしている混乱が、アメリカで始まった」ことを知っているのが明らかであったのに対して、マリア・テレジアにとって1756年には同様に、「アメリカでの争いは我々と少しも関係がない」のも確実なことであった<sup>31</sup>。オーストリアの女帝にとってはシュレージエンが問題であったが、一方フリードリヒ2世はザクセンへの「予防的」攻撃を正当化しなければならなかった。戦争がグローバルな次元を有していたかどうかは、したがってそれ自体政治的問題であった。しかしそれを越えて、両者の説明は、同時代に分断

<sup>29</sup> „Sehnsucht nach einem allgemeinen Frieden“, in: Der Apotheker, 16 St., 1762, S. 242. Nicole Waibel, Nationale und patriotische Publizistik in der Freien Reichsstadt Augsburg. Studien zur periodischen Presse im Zeitalter der Aufklärung (1748-1770), Bremen 2008, S. 315により引用。

<sup>30</sup> Historisch-geographische Beschreibung der in diesem Krieg von den Engländern eroberten französischen Antillischen Inseln: besonders von Guadeloupe und Martinique etc. zur Erläuterung der gegenwärtigen Kriegs-Staats- und Handlungs-Geschichte, Stuttgart 1762.

<sup>31</sup> Maria Theresia an Esterházy, Wien, 22. Mai 1756, in: Gustav Berthold Volz/ Georg Küntzel (Hg.), Preussische und Österreichische Acten zur Vorgeschichte des siebenjährigen Krieges, Leipzig 1899, S. 371-375, ここでは S. 374.

されたかたちで認識されたグローバル性にとって特徴的なものであった。何人かの七年戦争の同時代人たちにとっては全世界が炎に包まれていたのに対して、他の人たちにとっては火は自分の村や都市に限られていたのである。

## 2. 情報のグローバルな流通

例えばゲッティンゲン大学のオリエント言語の教授であったアンドレアス・ゲオルク・ヴェーナー (1693-1762) のような多くの日記筆者が、記述に際しておよそ彼らの故郷の外へ移動することなく、しかしグローバルな基準で情報を記録している。ただし彼らの基本的な関心は故郷での経緯に向けられていたのだが<sup>32</sup>。特に得られるところが多いのは、1759年9月13日の「エイブラハム平原」の戦いのあいだのケベック攻囲の結果に関する情報伝達であるが、この戦いによって北アメリカでの戦争は最終的にイギリス優位で決着したのであった。1759年10月16日火曜日に、ケベック占領についての情報がロンドンに到達し、「号外新聞 Gazette Extraordinary」で広められた。同日にゲッティンゲンのヴェーナーはまずフランクフルト新聞を反対の情報とともに受け取った。10月5日にパリ発で報じられているところでは、「アメリカからの諸書簡によれば、イギリス軍はケベック近郊でフランス軍によって打ち破られ、強力な嵐によってイギリス艦隊はローレンス川で散り散りになった」<sup>33</sup>。真の勝利者は、ようやく9日後の10月25日木曜日に伝えられた。「我が軍の」急使が次の情報を届けてきたという。「ケベックはイングランド軍に占領された」と<sup>34</sup>。さらに2日後、より詳細な情報が届いた。10月27日土曜日、ヴェーナーは次のように書き留めている。「アルトナ新聞の報道：ケベックが9月18日にイングランドのウォルフ軍のみによって征服されたというのは完全に正確である。イングランドの將軍ウォルフとフランスの將軍モンカルムは両者とも命を落とした」<sup>35</sup>。情報の証拠とのヴェーナーの慎重な接し方に特徴的なこととして、情報伝達経路の確認が、伝えられた出来事自体と同じくらのスペースを占めている。「9月21日、

---

<sup>32</sup> *Andreas Georg Wähler*, *Tagebuch aus dem Siebenjährigen Krieg*. Bearbeitet von Sigrid Dahmen, Göttingen 2012.

<sup>33</sup> Ebd., S. 114.

<sup>34</sup> Ebd., S. 115.

<sup>35</sup> Ebd.

この情報をもって1人のイギリス将校がケベックからピット氏のもとへ出発した。10月16日、この将校はロンドンに到着した。10月17日、この情報がロンドンからハーグへ向けて運ばれた。ハーグには10月19日から20日の間の夜に到達した」<sup>36</sup>。

ツェレでは、駐屯軍監査官ヨハン・フィリップ・ショヴァルトがケベックについての勝利の報をすでに10月24日水曜日に、つまりヴェーナーの1日前に記録している。「イギリスの急使がハノーファーに、ケベックを制圧したという報告をもたらした。人は追って次のことを耳にした。それは9月18日に降伏を伴ってなされたが、それ以前の13日には近くで血まぐさい会戦が行われた。イングランド軍は敵の多勢にもかかわらず勝利はしたが、しかしその勇敢なる将軍ウォルフを失い、フランス軍も将軍モンカルムを失った。つまり指揮をとった両将軍とも戦場に倒れたのである」<sup>37</sup>。

北アメリカからの情報は、この時代、おおそ1ヶ月を要するのみで、帝国ではいくつかの情報到達センター（この場合はハンブルクやハノーファー）に沿って広がり、そこから更に拡散した。日記におけるそれらの情報の受容は、新聞のスタイルに近いままで、できるだけ信頼している別の情報源によって保証された。神聖ローマ帝国の住民にとって、勝利と敗北、損害の数と獲得された武器、ないし情報の経路についての情報の受け容れは、まだ比較的冷静になされているが、サセックスのイースト・ホースリー村の店主トマス・ターナー（1729-1793年）の場合は、愛国者的な強調が加わっている。ターナーは10月20日土曜日に、去る水曜日に出された「号外」を読み、攻囲の結末、ウォルフとモンカルムの死、およびモンクトン将軍の負傷について、短く要約しており、その後大いに熱狂して次のように書いている。「ああ、あらゆる真のイギリス人にとってそれを見るのはなんとという喜びであろう。いかなる成功とともに、陛下の戦いを祝福することを神が喜ばれたかということ。イギリス人は目下のところヨーロッパ、アジア、アフリカ、アメリカで成功を取めている。私は今回の件について、我らが将軍たち、士官たち、一兵卒に至るまで、並外れた勇気と決断力を持って振る舞ったと考える。彼らがケベック市を放棄へと至ら

<sup>36</sup> Ebd.

<sup>37</sup> *Jens Mastnak/ Michael-Andreas Tänzer* (Hg.), *Celle im Siebenjährigen Krieg. Das Tagebuch des Garnisonsauditeurs Johann Philipp Schowart*, Celle 2010, S. 184-185.

しめうるまでに、多くのそして大きな困難があったであろうに<sup>38</sup>。

海外からの情報の伝達は、しかしヨーロッパへの一方通行ではなかった。ペンシルヴェニアのプロテスタント牧師であるハインリヒ・メルヒオール・ミュレンベルク（1711-1787年）の手紙からわかるように、人は植民地でもまた熱心に新聞を読み、ヨーロッパの住民が北アメリカの諸事件を追うよりも部分的にはなおより大きな関心をもって、ヨーロッパの諸事件をフォローしていた<sup>39</sup>。アインベック生まれのミュレンベルクは、1742年以来ペンシルヴェニアで生活していたが、まったく当然のようにジョージ2世を彼の王、イギリス軍を「我々の」軍と呼んでいた。何といっても彼が定期的の手紙をやり取りしていた彼の故郷は、ハノーファー選帝侯領の一部として1714年以来同君連合によってイギリスと結びついていたのであるから。プロヴィデンスからアインベックのクロメ牧師へあてた1759年2月27日のある手紙で、ミュレンベルクは次のように書いている。「過ぎ去った夏と秋、11月の終わりまで、プロイセン、ポンメルン、ブランデンブルク、シュレージエン、ヘッセン、ハノーファー諸邦、ザクセン、および特にドレスデン、トルガウ、ライプツィヒ、ハレ等々で最近どのような状態にあったかを、我々は憂いとともに当地の新聞で読んだ<sup>40</sup>。手紙の追伸には、さらに今日の南ニーダーザクセンへの関心とともに次のように書かれている。「新聞がこちらでついでに報じているように、昨秋アインベック、ゲッティンゲン、ノルトハイム、ミュンデン等々ではまさしく悲惨に、事態が推移したにちがひありません！ 機会があればもっと細かい情報をお願いします<sup>41</sup>」。戦争のグローバルな次元についての意識はミュレンベルクのような宣教師においては、伝統的に強く形成されてきた。何といっても彼は世界にまたがる信者共同体の運命を視野に入れていたのだから。ザムエル・テオドル・アルビヌスにあててミュレンベルクは、1756年11月1日に、広がっていく戦争を前にして、南インドのトランケバール〔現在のターランガンバディ〕の宣教師への注目とともに、次のように書いている。「東インドのイ

---

<sup>38</sup> David Vaisey (Hg.), *The Diary of Thomas Turner 1754-1765*, Oxford/ New York 1985, S. 191.

<sup>39</sup> *Aland*, Korrespondenz (注26).

<sup>40</sup> Ebd. S. 368.

<sup>41</sup> Ebd., S. 370.

ギリス植民地にいる我々の哀れな兄弟たちが、同じく窮乏、危険、苦難にあうことになるでしょう」<sup>42</sup>。

神聖ローマ帝国と海外における情報の受け手のグローバルな知識の量は、しかし過大評価されるべきでもない。ゲッティンゲンの教授ヴェーナーと類似のローカルな情報記録は、「フランス領インドのサミュエル・ピープス」こと商人アナンダ・ランガ・ピライ (1709-1761年) にも見られるが、彼はボンディシェリでフランス人の下で働いていた人物で、その1736-1761年にかけての私的な日記が12巻本の史料刊本で公刊されている<sup>43</sup>。基礎情報が欠けており、いくらかのものが想像によって付け加えられた場合、いかに強くいくつかの情報が歪曲されうるかということ、1758年2月26日にマドラスで書かれた、ピライの日記の書き込みが示している。

「朝の9時頃、幾人かの将校がやってきて、スーラトからの使者が次のような知らせを持ってきた、と言った。カナダ—黒人 *coffrees* が住む国だが—の王がイギリス人と同盟したので、フランス王はこの地を占領するために軍隊を送った。イギリス人はプロイセン王の助けによってフランス軍に対抗したが、その息子とその軍の多くがイギリス人の多くと共に殺されると、プロイセン王はもはやそれ以上もちこたえることができずに逃亡し、イギリス人は和平を求めたが、実際に和平が締結されたかどうかはわからない」<sup>44</sup>。

カナダ—は間違いなくカナダのことであり、プロイセン・イングランド対フランスという同盟構造も同じく正しい。カナダに *coffrees* が住んでいる (*coffrees* とはアフリカ出身の黒人労働者を指す言葉なのであるが) という言明は、中央及び北アメリカの南北の植民地の取り違えのせいでありうる。しかしプロイセン王の息子(!) が何を意味するかは、完全に不明のままである。噂の受容は、このように全く独自の知識状態を作り出し得たのである。

<sup>42</sup> Ebd., S. 301.

<sup>43</sup> *Chidambaram S. Srinivasachari*, Ananda Ranga Pillai, the 'Pepys' of French India. With a foreword by Sir Shafant Ahmad Khan, Madras 1940.

<sup>44</sup> *John Frederic Price/ Henry Dodwell* (Hg.), The private Diary of Ananda Ranga Pillai, Dubash to Joseph John Frederic François Duplex, ... an Governor of Pondichery: a record of matters political, historical, social and personal from 1736 to 1761; Translated from the Tamil, 12 Bde. Madras 1904-1928, Bd. 11, S. 114-115.

### 3. 絡み合った歴史の物質文化

新聞およびパンフレットと並んで、工芸品もまたグローバルなからみあい、政治的肩入れ、感情的同一化を投影する面を形成していた<sup>45</sup>。そうした「手でつかむことができる」戦争の物質文化においては、例えば見事に製作されたかぎタバコ入れのように、奢侈品消費の持つ古典的な代表実践が、幅広い公衆のための新たな工芸品シリーズと結びついていた<sup>46</sup>。同時に、世俗的な記念対象物から軍事的聖遺物が生じた。これらの対象とつきあって自分のものにしていくことについて、自己証言は再び豊富な根拠事例を提供する。

七年戦争の間に特に盛んであった記念品のジャンルは、近世の「ファン・グズ」というべき工芸産品であり、例えば好まれたイゼルローンのタバコ容器、記念章 *Vivat-Bänder*、絵柄付きのねじ込みコイン、居酒屋の看板や陶磁器セットなどであった<sup>47</sup>。

タバコ容器は、どの消費者にも1ターラーくらいの価格で、戦争のモチーフを自分の上着のポケットに入れて手で触れるような形で我がものにするのを可能にした。タバコを勧める際に、この容器は会話の出発点になり得たし、特定の出来事の記憶を物質的に引き出しうるものにするのを可能にした。戦場のグローバルなからみあいもまた、このメディアにおいてその表現を見出した。もちろん、ヨーロッパの戦場よりもはるかに少ない程度においてではあったが。それでタバコ容器に描かれて残っているのは見たところ、海外の軍事的モチーフとしては1762年2月のマルティニク島占領だけのようである<sup>48</sup>。しかし、角

---

<sup>45</sup> *Ute Frevert*, *Gefühlspolitik. Friedrich II. als Herr über die Herzen*, Göttingen 2012, S. 88-90; *Christopher Clark*, *Preußen: Aufstieg und Niedergang 1600 - 1947*, München 2007, S. 266-267

<sup>46</sup> 以下の部分については、*Marian Füssel/ Sven Petersen*, *Ananas und Kanonen. Zur materiellen Kultur globaler Kriege im 18. Jahrhundert*, in: *Historische Anthropologie* 23/3 (2015), S. 366-390を参照。

<sup>47</sup> *Wolf-Dieter Könenkamp*, *Iserlohner Tabaksdosen. Bilder einer Kriegszeit*, Münster 1982; *Paul Seidel*, *Vivatbänder oder Seidenbänder im Hohenzollern-Museum*, in: *Hohenzollern-Jahrbuch* 16 (1912), S. 128-153; *Konrad Vanja* (Hg.), *Vivat - Vivat - Vivat! Widmungs- und Gedenkbänder aus drei Jahrhunderten*, Berlin 1985; *Ernst Preßler*, *Schraubtaler und Steckmedaillen. Verborgene Kostbarkeiten*, Stuttgart 2000.

<sup>48</sup> *Könenkamp*, *Iserlohner Tabaksdosen* (注47), S. 74f. を参照。

型の火薬入れには数多くの海外のモチーフが見出されるが、それはどこにでもある日常用品において記憶と同一化を結びつける、もう1つの別の物品グループであった<sup>49</sup>。角型火薬入れは、地図、場所、武器、紋章、アクターをとりわけ「フレンチ・インディアン戦争」の領域から示しているが、1762年のイギリス軍によるハバナ占領の図像もある。多くの彫り紋様は、見たところ所有者自身によってなされたか、少なくとも巧い戦友に委託されたものようである。

そこに見られる、記念品を作り上げる際の兵士独自のイニシアティブは、例えば1757年6月のビーレフェルト近郊の戦闘の後、ブラウンシュヴァイクの兵士グローテヘンがその父に宛てて次のように書いていることに示されている。「私の銃は端から上へ4分の1のところで散裂弾に撃たれて完全に壊されました。この便で鉄の銃身の残った端を送りますので、記念に大切に取っておいて下さい。これを見れば、いかに神のご好意が弾丸を私から遠ざけてくれたかがわかります。その弾丸は私の頭のごく近くにあつて、しかし骨の代わりに鉄を打ち砕くことになったのですから<sup>50</sup>。」

そのような保管と工芸的加工の混合物を、例えばコリンのユダヤ人街で、1757年のコリンの戦闘の後、戦場に大量に遺棄された擲弾兵の帽子の真鍮プレートから製作されたランプの傘、いわゆる Wandblaker が示している<sup>51</sup>。まさしく軍事的なアイテムが、近世のリサイクルの歴史の中で繰り返し登場する。略奪戦利品は民間人にとってもまた、記念メディアになった。例えばヘルツベルク出身のワイン商人ツェルマンは、彼の日記において次のように報告している。「ユスト・ハインリヒと従僕ダニエルは……略奪した」「略奪品は裸のサーベルで、彼が会ったフランス軍の憲兵がヒルデスハイム後方で失った物なのかもしれないが、私はそれを、このとほうもない戦時期の永遠の思い出として、取っておくことにしよう<sup>52</sup>。フランス人捕虜がイギリスで作った作品のよう

<sup>49</sup> *Stephen V. Grancsay*, *American Engraved Powder Horns: A Study Based on the J. H. Grenville Gilbert Collection*, New York 1945.

<sup>50</sup> *Marian Füssel/Sven Petersen* (Hg.), *Johann Heinrich Ludewig Grotehenn, Briefe aus dem Siebenjährigen Krieg. Lebensbeschreibung und Tagebuch*, Potsdam 2012, S. 37.

<sup>51</sup> *Fritz Waltermann*, *Mützenblech als Wandblaker*, in: *Zeitschrift für Heereskunde* 67 (2003) Nr. 408, S. 82f. を参照。

<sup>52</sup> *K. Zellmann* (Hg.), *Aus schwerer Zeit: Tagebuch des Johann Philipp Zellmann zu Herzberg am Harz aus der Zeit des siebenjährigen Krieges*, Wernigerode 1900, S. 20.



に、戦争捕虜は多くの工芸品を木や骨から製作した<sup>53</sup>。そこから最後に、いくつかのアイテムは物質的な自己証言としても解釈されうるのではないのか、という方法論の問題が提起される<sup>54</sup>。

## 結論と展望

七年戦争は18世紀における政治化、メディア化、グローバル化の包括的な構造上のプロセスにとって一種の指標と見なされうる。情報は、切望された消費財になると同時に、メディアのグローバル化の動力ともなった。北アメリカとヨーロッパの間の情報伝達は4～6週間、ヨーロッパとインドの間では6～7ヶ月を必要とした。グローバルに展開された紛争としての七年戦争に関する問いにとっては、間近からの視点はアンビバレントなシナリオを明るみに出すが、それはそのニュアンスの点で個々の自己証言から和平会談にまで及んでいる。情報だけでなく人もまた、世界の間を循環した。高い空間的移動性を、スイス人マルクス・ウールマン (1738-1764) のようないわゆる「媒介者たち *go between*s」が示しているが、彼はフランス軍の兵士として勤務するためにヴェストファーレンへ旅立ち、しばらくしてそこを脱走し、オランダである船の仕事に就き、そして最終的には、キューバ征服をイギリス艦隊が開始したとき、ハバナで再び見出された<sup>55</sup>。ウールマンのような人物は疑いなく稀であったが、しかし舞台の連鎖をまざまざと示している。ウールマンがハバナとチューリヒの間の時差を計算しようと試み、あるいはアナタダ・ランガ・ピライがフリードリヒ2世の子どもたちについて南インドで考えをめぐらしたならば、それは戦争劇場のからみあいから意味を引き出そうとした、個人の2つの試みにすぎなかったのであり、決して一般化され得ない。彼らに対しては、その観測範囲が自分の村の境界で終わっているような、数ダースもの証言が向き合っている

---

<sup>53</sup> *Francis Abell*, *Prisoners of War in Britain, 1756 to 1815. A Record of their Lives, their Romance and their Sufferings*, London u.a. 1914.

<sup>54</sup> 人形の町を例とした方法論争については、*Annette C. Cremer*, *Mon Plaisir: die Puppenstadt der Auguste Dorothea von Schwarzburg (1666-1751)*, Köln [u.a.] 2015を参照。

<sup>55</sup> *Markus Uhlmann*, *Das abwechselnde Fortün oder das veränderte Schicksal eines Jünglingen. Ein Reisebericht aus der Zeit des Siebenjährigen Krieges*, hg. von Jean-Pierre Bodmer, Zürich 1980を参照。

のである。

情報の受容と、タバコ容器、陶磁器、記念章のような記念品による能動的な同一化を通じた、政治・軍事的事件史への参与は、住民の比較的広い部分に、どちらの側に結びついていると感じるかにかかわらず、今までになかった程度の感情を帯びた政治化への道を開いた。軍事的な出来事を受容の歴史にとって、そうした場合に特有のことではないが、しかしここで紹介された諸史料から例示的によくあとづけられうるのは、軍事的出来事の意義は後から比較的大きな歴史的距離をおいて見たときにはじめて形作られるという確認である。インド亜大陸におけるその後の展開にとって決定的であったと今日目されている、1757年のプラッシーと1760年のワンディウォッシュという2度のイギリス軍の戦闘は、神聖ローマ帝国の読者にはほとんどおおよそ言及もされていないが、その一方でこの間比較的重要でないと見なされるようになった征服、例えば1758年のゴレ島征服などが、たいいていの証言において言及されている。調査された自己証言のグローバルな認識の地平を観察すると、大西洋の空間は、アフリカまで、またカリブ海に至るまで非常にプレゼンスが大きいものに対して、南アジアの戦争の舞台はわずかな例外を除いてほとんど視野に入っていない、ということが目に付く。イギリスの公衆の間では遅くとも1758/1759年の成功以来、軍事的成功の全世界にまたがる規模についての意識が存在した。「地球のすべての方面で」、「世界のすべての方面で」、「地球のこれほど多くの異なった部分で」、「既知の世界の全ての部分で」といった賀状の諸定式が、そのことをはっきりと示している<sup>56</sup>。

イギリスやそれと同君連合で結ばれていたハノーファー選帝侯領の住民にとって、ヨーロッパ外の戦争の諸事件への注目は、おそらく特に自然なことだったであろう。シュロップシャーの店主ターナー、ハノーファーのパン屋親方アベルマン、ツェレの駐屯軍監査官ショヴァルト、ゲッティンゲンの大学教授ヴェーナーなど、すべての身分的環境を貫いて、そのことを確認できるように

<sup>56</sup> *Marian Füssel*, Zwischen Empire und Reich. Zur Kommunikation des globalen Siebenjährigen Krieges im Raum der Personalunion, in: Arndt Reitemeier (Hg.), Kommunikation & Kulturtransfer im Zeitalter der Personalunion zwischen Großbritannien und Hannover. „to prove that Hanover and England are not entirely synonymous“, Göttingen 2014, S. 79-99, ここでは S. 97を参照。

思われる<sup>57</sup>。その際にはしかし、同君連合における分離プロセスと相互無理解の諸形式をも無視してはならない。七年戦争は、グローバルな規模でのコミュニケーション的濃密化の一局面を形成したが、神聖ローマ帝国と大英帝国との間の共通性の限界をも明確に指示するものであった。このことを例えばゲッティンゲン大学の教授ザムエル・クリスティアン・ホルマンの戦争賛美はきわめて明瞭に定式化した。それは既に戦争中に書かれていたが、戦争終結後にはじめて出版されたものである。「国王のドイツの臣民の一部はそれゆえ、その同盟者である哀れなヘッセンとともに、イギリス人のためにほとんど素寒貧になるまで支払わなければならなかった。したがって、彼らもまたイギリス人がこの戦争で獲得した大きな利益に与っていたとしたら、それは何と正当であったことか（しかし実際には戦争から何の利益も受けていない）。彼らは、彼らの領邦君主が同時にイギリス人のあるじでもあったということ以外に、この戦争全体と何の関係もなかったのであるが、そのイギリス人こそがアメリカでこの商人戦争を始め、そして同所でまたそれを継続しなければならなかったのである」<sup>58</sup>。

「海外政策」の枠内における「商人戦争」は、ハノーファー選帝侯領の人々のもとで無理解に突き当たったが、彼らには、大部分他人事であるような帝國的計算のために、自分たちが不必要な苦しみにさらされているように見えたのであった。愛国者的な強調はそれゆえここでは期待され得ない。そうした感情が北西ドイツの帝国諸領邦の住民の間で役割を果たしたとすれば、それはフランス人と戦って勝利を取めたフェルディナント・フォン・ブラウンシュヴァイクに対してであった。ただし、「商人戦争」から同時代人たちが距離をおいていたからといって、神聖ローマ帝国における七年戦争の経済的側面に目をつぶるという結果に至るべきではない<sup>59</sup>。シュレージエンをめぐる戦いはまた、全く

---

<sup>57</sup> Ebd.

<sup>58</sup> [Samuel Christian Hollmann], Lob des Krieges: in einigen Gesprächen entwickelt, Teil: 2, Frankfurt u.a. 1770, S. 412-413, これについては既に *Hermann Wellenreuther*, Göttingen und England im 18. Jahrhundert, in: 250 Jahre Vorlesungen an der Georgia Augusta 1734-1984. Akademische Feier aus Anlaß der 250. Wiederkehr des Tages der ersten Vorlesung an der Georgia Augusta am 14. Oktober 1984 in der Aula der Georg-August-Universität Göttingen, Göttingen 1985, S. 30-63, ここでは S. 45-49を参照。

<sup>59</sup> 財政と兵站に関する概観として、*Schumann/ Schweizer*, Seven Years War (注10), S.

本質的に経済的資源をめぐる戦いであった<sup>60</sup>。

実際には、農民層は別として、社会的身分は、居住地や「政治的」心情と比べて、グローバルな関心についての基準にはなっていなかったように見える。ハンブルク、ケルン、アウクスブルクといったメディアの積み替え地は、メディアの流通から見て辺鄙な場所とはまた違った情報へのアプローチを提供した。メディアの関心の焦点は七年戦争の間なおより強く大西洋世界に集中しており、一方南アジアははっきりとその背後に退いていた。18世紀の最後の四半世紀になってようやく、インドが、イギリスと、そしてまたドイツの公衆のあいだでより強いテーマへと発展したが、その前に北アメリカの植民地は独立への道を歩み始めたのであった。

関係史に焦点をあてることは、七年戦争についての歴史叙述で国民国家に視野を限定することに対しての重要な矯正であったし、今なおそうである。しかし、グローバル・ヒストリー全体にとって長く特徴的な、結びつき、越境者、接触領域、流通、領有についての探求が、次のことについて誤解を与えてはならない。つまり、これら全てのアクター、空間、プロセスとそれらの結びつきは、まずは一度経験的に調査されるべき対象であり、前提ではないのだということである。例えば我々はからみあいの増大の代わりに、新たな境界設定と隔絶化をも観察しうるのである。北アメリカにおいて、「フレンチ・インディアン戦争」は「中間地帯 Middle Ground (R. White)」の終焉を意味しており、インドにおいてもまた、結び付きが新たに構築されるのと同様に断ち切られもした<sup>61</sup>。流通のプロセスには、コントロールの実践という対抗措置が取られたのであり、例えばイギリスの大西洋封鎖が示しているように、情報は流通するのみならず、また検閲されもしたのである。巨大な量のイギリスの「捕獲書類 prize papers」(今日では貴重な史料類型であるが)は、いかに多くの通信がまさにその名宛人たちのもとに到達しなかったかということを示している<sup>62</sup>。フ

---

91-130を参照。

<sup>60</sup> *Marcus Warnke*, *Logistik und friderizianische Kriegsführung. Eine Studie zur Verteilung, Mobilisierung und Wirkungsmächtigkeit militärisch relevanter Ressourcen im Siebenjährigen Krieg am Beispiel des Jahres 1757*, Berlin 2018.

<sup>61</sup> *Richard White*, *The Middle Ground: Indians, Empires, and Republics in the Great Lakes Region, 1650-1815*, New York 1991.

<sup>62</sup> *Christina Beckers/ Dagmar Freist/ Lucas Haasis*, *Die Prizepapers - Ein*

リードリヒ2世自身が、戦後、戦争の叙述について精力的な「門番」として振る舞った<sup>63</sup>。そして知識の分野においてもまた、我々は同じように不知にいきあたる。例えばハノーファー・イギリスの同君連合とイギリス植民地の空間の内部において濃密化していく知識の通路と並んで、我々はまた、グローバルに激しく争われた空間についてほとんど注意を向けないようなアクターたちをも見出す。そうした空間は、多くの人々にとって、まさに「数モルゲンの雪」(ヴォルテール)にすぎないままなのであった。戦争が作り出したのは、分断されたグローバル性であった。からみあいと解体は平行して現れたのである。世界の潜在的な炎上可能性はしかし、近代世界システムの抵当負担であり続けることになったのである。

(訳者後記)

本稿は、2019年3月21日に京都大学文学研究科で開催された近世史研究会において、マリアン・フュッセル教授が行った講演に本文の加筆と注の補足が施されたものである。同教授は、田口が代表のJSPS 科研費基盤B (16H03535)の資金によって来日し、約10日間滞在して、本稿のもとになったものを含めて2回の講演を行った。ご多忙中、遠路来日されたフュッセル教授に改めて感謝するとともに、研究会の場を用意していただいた小山哲教授(京都大学文学研究科)、渋谷聡教授(鳥根大学法文学部)に御礼を申し上げる。また当日お手伝いいただいた藤田風花さん、米倉美咲さんをはじめとする京都大学文学研究科・文学部の院生・学生の皆さんにも感謝したい。

フュッセル教授の経歴と業績については、本誌70巻3号307-308頁の訳者後記を参照していただきたい。そこに挙げられた文献のほかに、本稿の注1にある、*Der Preis des Ruhms. Eine Weltgeschichte des Siebenjährigen Krieges*, München 2019 が最近刊行された。本稿は、このモノグラフのための研究作業を基礎としつつ、フュッセル教授の七年戦争観をコンパクトかつ具体的に語っている。18世紀におけるグローバル化という相のもと、同時代の多様な証言を

---

Jahrhundertfund, in: Projekthomepage Prize Papers, Globale Mikroggeschichte Universität Oldenburg, [18.06.2013], URL: <http://www.prizepapers.de/>

<sup>63</sup> *Frank Zielsdorf*, *Militärische Erinnerungskulturen in Preußen im 18. Jahrhundert. Akteure – Medien – Dynamiken*, Göttingen 2016, S. 36-37.

史料として、戦争の認識とイメージ、情報の流通、物質文化・消費文化といった視角から、生き生きとした斬新な七年戦争像が提示されている。

講演当日の質疑では、グローバル・ヒストリーの意義、従来の戦争史研究との関係、ハノーファー・イギリスの同君連合の評価、モノとその流通が人々の意識に与えた影響、ミクロ史とマクロ史の関係、個別行為・個々人の意識と全体的構造との関係、など多岐にわたる論点について、突っ込んだ議論が交わされた。討論にご参加いただいた方々および長時間にわたってお答えいただいたフュッセル教授に御礼を申し上げます。

本稿が、フュッセル教授のご研究への導入となり、また七年戦争と18世紀史を深く考えるきっかけとなれば、訳者としては幸いである。

(田口正樹)